大学生のケータイ・メールによるコミュニケーションにおける親密度と自己の開示に関する調査研究

A Study on the Relationship between Intimacy and Self-disclosure in Mobile E-mail Communication by University Students

石川　勝博 ISHIKAWA, Masahiro

● 常磐大学
Tokiwa University

Keywords ケータイ・メール，コミュニケーション，親密度，自己開示，メル友
mobile e-mail, communication, intimacy, self-disclosure, e-mail friends

ABSTRACT

本稿の目的は，大学生のケータイ・メールによるコミュニケーションでの相手との親密度（親しい友人，それほど親しくない友人，メル友）と自己開示との関連を探索的に明らかにすることであった．その検討のために，茨城県と埼玉県の大学生548名を対象とした調査を2004年1月と2月に実施した．そのうち，542名が分析対象者となり，「メル友がいる」回答した者は106名であった．彼らについて，親しい友人，それほど親しくない友人，メル友それぞれに対する自己開示的なコミュニケーションを一元配置分散分析によって，探索的に明らかにした．今回の調査は，基礎的なものと位置づけられ，今後も検討を進めることが必要である．

This paper investigates the relationship between intimacy of acquaintaces (close friends, friends who were not so close, and e-mail friends) and self-disclosure in mobile e-mail communication by university students. A survey was conducted in order to investigate the RQs through a written questionnaire during January and February 2004. The subjects were 548 Japanese university students from Ibaraki and Saitama prefecture. The total of valid responses was 542. 106 respondents answered that they have friends that they contact through e-mail. Analysis of variance was utilized for analyzing the data. Further investigation is necessary as the findings in this study are from a preliminary survey.

1. 研究の背景と目的

大学生を対象とした様々な調査によれば，ケータイは通話よりもメールに用いられる傾向にある（三宅，2001；橋元ら，2001；田中，2001；遠藤，2005；石川，2005；三宅，2005；古谷と坂田，2006）．つまり，ケータイ・メールは，大学生のケータイ・コミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている．

ケータイ・メールの対人関係への影響について，岡田ら（2000）は，ケータイをよく使う人は，実際に人と会うことが多いことを示している．つまり，ケータイ・メールでのコミュニケーションが活発な者は，対面的コミュニケーションも活発であると言える．中村（2003）は，自身の一連の調査結果を踏まえて，「携帯メールの利用が多い若者は，外向的で，対面関係が活発で，友人も多く，深い人間関係を好み，孤独感も少ない．街中で携帯メールに夢中になっている若者を見ただけで，現実の人間関係から逃避しているとか，バーチャル・リアリティの中にどっぷり浸かり，暗くて不健全である，などと考えるのは，大きな間違いである（p.93）」とまとめて，ケータイによる対人関係の希薄化に対して否定的な立場をとっている．

さらには，ケータイ・メールは，親しい数人の仲間とのインフォーマルな関係，「強い紐帯（Granovetter，1973；Fisher，1982）」といった「内輪」の関係の維持に用いられることも示されている（辻と三上，2001；小林と池田，2004など）．「ケータイによる対人関係というと，希薄なイメージがあるようだが，少数の友人と積極的に関わるという意味で，若者は深い対人関係を築いている（石川，2007，p.18）」と言えよう．敷衍すれば，ケータイは「狭いながらも深い対人関係」を構築するメディアと捉えられる．

しかしながら，一般的には，ケータイ・メールによって，「広くて浅い対人関係」が構築され，対人関係の希薄化が生じるという懸念があるようである．その際に，俎上にのせられるのが，ケータイ・メール上だけの知り合い，ケータイ・メール交換のみを行う友人「メル友」の存在であろう．メル友とのケータイ・メールによるコミュニケーションは，相手の顔が見えないがために，「出会い系」などの犯罪の温床をうみだすおそれがある．これが，問題視されるのである．

このような理由もあってか，ケータイ・メールによる顔の見えない者同士のコミュニケーションについては，対面的それよりも否定的に捉えられがちである．例えば，読売新聞（2006年6月12日）の世論調査の設問「携帯電話メールでのコミュニケーションが増えると，人付き合いや対人関係にどのような影響があると思うか（複数回答，%）」への回答結果として，プラス面「互いに遠慮が少なくなるので，対人関係が積極的になる」は8.7%，マイナス面「互いの表情が読み取れないので，誤解が多くなる」は，34.3%という数字が示されている．「顔が見えない状況では，情報が上手く伝わらずにコミュニケーションが円滑に図れない」と捉えられている証左と言えよう．

ケータイ・メールをやりとりする相手としては「普段会う友人」が挙げられることが多いが（中村，2003），実際にメル友がいる大学生はどの程度いるのだろうか．辻と三上（2001）が2000年6月初旬に実施した大学生（有効回収票，東洋大学354票，関西大学280票）を対象とした調査によれば，両大学とも「メル友」がいるケータイ・メール利用者は1割強（東洋大41名，関西大38名）であった．この数字を多いと見るか少ないと見るか議論の余地があるが，一定数の大学生が「メル友がいる」としている事実は見逃せないだろう．

メル友とどのようなコミュニケーションを図っているかについては，同調査では，メル友に対する意識の側面から検討されている．その結果，質問項目「メル友とはあまり関係を束縛されずにすむ」の肯定率が最も高かった．よって，「非束縛性が1つのポイント」であると解釈されている．つまりは，メル友との関係は，深く立ち入らないものである可能性が示唆される．

その一方で，一部の報道では「メル友などメ

ディア上の直接面識のない人の方が，しがらみや恥ずかしさを感じないために，気楽に相談しやすい，見えない相手の悩みを聞くこともある」などといった若者の声が驚きを持って伝えられている．こうした現象は突如現れたものではない．1990年代半ば頃のベル友に関する報道でも伝えられていることである（松田2006a）．非対面の顔が見えない相手とのコミュニケーションに対しては批判もあるが，「メル友とは自己開示的なコミュニケーションが図りやすい」との声もある．

メディア上の非対面状況では「自分をみせられる，自己開示あるいは自己呈示しやすい」といった言説は，ケータイ・コミュニケーション研究よりも，主に社会心理学におけるCMC（Computer Mediated Communication）研究で扱われてきた．杉谷（2007）は，日本のCMC研究の結果について，CMCが対面などの他のコミュニケーションと比較して「話しやすい」と評価されているとする．

その一方，メディア上では相手の顔が見えないことから，情報の不足し，思わぬ誤解や「フレーミング（flaming）」（Kieslerら，1985）が生じ，対人関係を損ねるという研究結果もある．CMCにおいては，自己開示が促進されることもあれば，フレーミングが生じることもある．ここで問題とされているのは「非言語的てがかりの少なさ」である（杉谷，2007）．

ケータイ・コミュニケーション研究では，「非言語的てがかりの少なさ」と類似する概念として，ケータイ・メールにおけるキューレスネス（Cuelessness）が取り上げられている（中村，2001）．これは，視覚的，物理的情報が欠如することを意味している．キューレスネスは，ビジネス場面においては，心理的距離を遠ざけるため，ビジネスライクになり強者に有利になる状況を生み出す一方，「いのちの電話」のような電話相談においては，匿名性が心理的距離を近づけ，話しやすくなる状況を生みだすとされる．

中村（2001）によれば，ケータイ・メールのキューレスネスのプラス面として，1）交友が深まること，2）まだ親しくない間柄のコミュニケーションを促進することがある．マイナス面としては，1）あまり近くない間柄なのに近づきすぎる危険性，2）相手の反応が伝わらないので，コミュニケーションが失敗することがある．ケータイ・メールは，「キューレスなメディアなので，雰囲気が伝わらない．この点では心理的距離が遠いメディアであるといえる．しかしそれ故に，面と向かっては言いにくいこと（たとえば感謝や怒りといった感情）をメールでは表現しやすい．このことが結果として，対人関係上の心理的距離を近くする（中村，2001，p.298）」のである．こうした点を踏まえて，ケータイ・メールのメディア特性は「ほんとうの気持ちがいえるメディア」と表現されている．

同様の指摘は他の研究でも見られる．中村が大学生を対象に2002年に行った「松山調査」でも，利用者の36.5%が「携帯メールでは，会ったり電話では言いにくい，本当の気持ちが言える気がする」と回答したと報告されている（中村，2005）．辻（2003）は，大学生を対象とした調査において，「電話や対面では話しにくいことも，メールなら書きやすいような気がする」という項目に69.5%が同意していると報告している．

以上のように，キューレスネスがケータイ・コミュニケーションに及ぼす影響には，プラス面とマイナス面があり，一概に是非を論じることはできない．しかし，少なくとも面と向かって話しにくい個人的会話や当惑的会話などは，非対面状況においては，雰囲気が伝わらないがために，活性化する可能性が指摘されている（中村，2001）．

「ケータイ・メールでは対面状況では話しにくいことが伝えられる」とされる理由には，先に述べた「非言語的てがかりの少なさ」といった「キューレスネス」が関わっているが，他にはどのような要因があるのだろうか．川口ら（2003）は，日常生活における「親密度」に着目している．この研究では，ケータイ・メールでの自己開示は親密度が相対的に高くない相手に対して行われ，親密度が高い相手に対しては，直接話す傾向が見られることを示している．古谷ら（2005）

の研究では，親密度の変化と自己開示との関連について，親密度が増すとケータイ・メールではうわさ話など比較的表面的な内容が増加する傾向が見られたとしている．さらには，時間がたつことで親密度が変化しない場合や下がった場合も，ケータイ・メールでの開示量は変化しなかった．この結果について，彼らは，ケータイ・メールは相手との最低限の関係を維持し，対面の開示が土台となって親密度に影響する可能性が示唆されたと解釈している．ケータイ・メールでの開示は，それほど親しくない相手に対して行われ，親密度が増した場合も，開示の内容は表面的である可能性が示唆されよう．

この結果は，「メル友などメディア上の直接面識のない人の方が，しがらみや恥ずかしさを感じないために，気楽に相談しやすい，見えない相手の悩みを聞く」といった声とは，矛盾することになる．

以上を鑑み，本研究では，ケータイ・メールによるコミュニケーションの相手の親密度と自己開示的コミュニケーションの関連について，探索的に明らかすることを目的としたい．

2. 調　査

2. 1　調査の目的

ケータイ・メールによるコミュニケーションの相手の親密度と自己開示的コミュニケーション関連性を探索的に明らかにすることである．

2. 2　調査の方法

茨城県内のA大学（93名），同B大学（239名），埼玉県内のC大学（216名）の学生，計548名を対象として，2004年1月と2月に，集合法による質問紙調査を実施した．いずれも授業中に質問紙を配布し，その時間内に回収した．

2. 3　分析対象者の内訳

548名から 回答に不備があった6名（A大学3名，B大学1名，C大学2名）を除く，542名である（表1）．このうち，「メル友がいるか」という質問への回答は，いる106名（19.55%），いない433名（79.89%），無回答3名（0.5%）であった．メル友がいる106名（A大学32名，B大学44名，C大学30名）の内訳は，表2に示すとおりである．メル友がいる者が約2割という結果になった．

表1　分析対象者の内訳（全体）

学年	性別 男	女	無回答	合計
1年	47	88	0	135
3年	44	85	0	129
2年	81	148	0	230
4年	22	17	0	39
無回答	1	0	1	2
合計	197	339	1	542

表2　分析対象者の内訳（メル友がいると回答した者）

学年	性別 男	女	合計
1年	11	18	29
2年	13	21	35
3年	9	19	28
4年	7	6	13
無回答	1	0	1
合計	41	64	106

2. 4　調査内容

2. 4. 1　調査対象者の属性

大学名，学科名，学年，性別，年齢について質問した．

2. 4. 2　ケータイ・メール利用状況

1日あたりのおおよそのメールやりとり回数を回答させた．1）0～4回，2）5～9回，3）10～14回，4）15～19回，5）20回以上の選択肢から1つを選ばせた．

2. 4. 3　メル友の人数

「あなたにはメル友が何人くらいいますか」という質問に対して，1）0人，2）1～4人，3）5～9人，4）10～14人，5）15～19人，6）20人以上の選択肢から1つを選ばせた．なお，質問にあたっては，メル友の意味として，「ケータ

イ・メール上だけの知り合い」との注釈をつけた.

2.4.4 親密度と自己開示的なコミュニケーション

親密度の測定尺度は，ケータイに関わる対人関係の親密度を扱っている青少年研究会（2001）のものを参考にした．この研究では，ケータイが友人形成にどのように役立つのかを検討するため，友人を「親友（とても親しい友人），仲の良い友人，知り合い程度」の3段階に分けている．これを参考に，親密度の尺度として，「親しい友人」，「それほど親しくない友人」，「メル友（ケータイ・メール上だけの知り合い）」を設定した．

さらに，それぞれに対するケータイ・メール上での自己開示的なコミュニケーションについて質問した．質問項目は，一般的に問題とされるメル友との自己開示的コミュニケーション（メル友に悩みを打ち明けられるなど）に関する項目を用意した．各項目は，「全くちがう」から「全くその通り」までのリッカート法による5ポイントスケールで測定された（表3と表4）．最高点は5点，最低点は1点である．なお，各項目の質問紙上での順序は，ランダムに配置された．

表3 「親しい友人」「それほど親しくない友人」とのケータイ・メールによるコミュニケーションに関する項目

1. メールの方が直接話すよりも，面と向かって話せないことが伝えやすい
2. メール上では直接話すよりも，型にはまったやりとりをしてしまう
3. メール上で，悩みを相談したことがある
4. メールの方が直接話すよりも，気持ちが素直に表現できる
5. メールで伝えた方が直接話すよりも，相手は客観的意見をくれると思う

表4 「メル友」とのケータイ・メールによるコミュニケーションに関する項目

1. 知り合いに話せないことを伝えたことがある
2. 型にはまったやりとりをしてしまう
3. 悩みを相談したことがある
4. 気持ちが素直に表現できる
5. 客観的意見をくれると思う

3. 分 析

3.1 メル友の数とメールのやりとり回数

表5は，1日あたりのおおよそのメールのやりとり回数とメル友の人数をクロス集計したものである．

542名中メル友がいるとした者は前述のとおり106名（19.55%）である．そのうち，メル友数を1～4名と回答した者が86名と最も多く8割以上（81.1%）を占める（表5）．次いで，5～9人

表5 1日あたりのおおよそのメールのやりとり回数とメル友の人数

メールのやりとり回数	メル友数							全体
	0人	1～4人	5～9人	10～14人	15～19人	20人以上	無回答	
0～4回	51	10	3	0	0	0	0	64
5～9回	133	30	4	0	0	0	0	167
10～14回	105	17	4	0	0	0	2	128
15～19回	45	11	1	1	0	0	0	58
20回以上	97	18	5	0	2	2	1	123
無回答	1	0	0	0	0	0	0	1
全体	433	86	17	1	2	0	3	542

という回答が17名（19.76%）であり，それ以上の人数を回答した者は3名と少数であった(表5)．さらに，メル友の有無とメール回数とをクロス集計したものが，表6である．

表6　メル友の有無と1日あたりのメールやりとり回数

メールのやりとり回数	メル友の有無 いる		いない	
0〜4回	13	12.26%	51	11.78%
5〜9回	34	32.08%	133	30.72%
10〜14回	21	19.81%	105	24.25%
15〜19回	13	12.26%	45	10.39%
20回以上	25	23.58%	97	22.40%
無回答	0	0.00%	1	0.23%
全体	106	100.00%	433	100.00%

「メールやりとり回数」について，メル友がいる群とメル友がいない群において，差異が見られるかを検討することにした（表6）．コルモゴロフ・スミルノフ検定をもちいて，両群の分布の違いを分析したところ，差は見られなかった．すなわち，メル友の有無によって，メールやりとり回数に差は認められなかった．

3．2　親密度とケータイ・メールによる自己開示的なコミュニケーションの分析

以下では，メル友がいると回答した106名（表2）を対象とする．ケータイ・メールによる自己開示的コミュニケーションに関する5つの質問項目について，「親しい友人」，「それほど親しくない友人」，「メル友」との間で比較を行う．

3．2．1　「質問項目1 面と向かって話せないことが伝えやすい」の分析

表7は，各条件の「質問項目1　面と向かって話せないことが伝えやすい」の得点平均と標準偏差を示したものである．一元配置分散分析の結果(表8)，条件の効果は有意であった(F(2,315)=6.08, p<.001)．さらに，最小有意差法（LSD法）を用いた多重比較を行ったところ，親しい友人(M=3.22）とメル友（M=2.69）との間（5%水準），それほど親しくない友人（M=3.20）とメル友（M=2.69）の間（5%水準）で有意差が認められた．その一方，親しい友人とそれほど親しくない友人の間には有意差はみられなかった．

表7　質問項目1の得点平均と標準偏差

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
平均	3.22	3.20	2.69
標準偏差	1.14	1.18	1.42

表8　質問項目1の分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
グループ内	19.04	2	9.52	6.08***
グループ間	493.58	315	1.57	
合計	512.62	317		

***p<.001

3．2．2　「質問項目2 直接話すよりも，型にはまったやりとりをしてしまう」の分析

表9は，各条件の「質問項目2 直接話すよりも，型にはまったやりとりをしてしまう」の得点平均と標準偏差を示したものである．一元配置分散分析の結果(表10)，条件の効果は有意であった(F(2,315)=10.88, p<.001)．さらに，最小有意差法（LSD法）を用いた多重比較を行った．親しい友人(M=2.80)とそれほど親しくない友人(M=3.29)との間(5%水準)，それほど親しくない友人(3.29)とメル友（M=2.59）との間（5%水準）で有意差が認められた．その一方，親しい友人（M=2.80）とメル友（M=2.59）の間には有意差はみられなかった．

表9　質問項目2の得点平均と標準偏差

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
平均	2.80	3.29	2.59
標準偏差	1.09	1.15	1.12

表10　質問項目2の分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
グループ内	27.25	2	13.62	10.88***
グループ間	394.33	315	1.25	
合計	421.58	317		

***p<.001

3. 2. 3 「質問項目３ メールで悩みを相談したことがある」の分析

表11は，各条件の「質問項目３ メールで悩みを相談したことがある」の得点平均と標準偏差を示したものである．一元配置分散分析の結果（表12），条件の効果は有意であった（F (2,315) =45.83, p<.001）．さらに，最小有意差法（LSD法）を用いた多重比較を行った．その結果，親しい友人（M=3.52）とそれほど親しくない友人（M=1.90）との間（5%水準），親しい友人（M=3.52）とメル友（M=2.66）との間，さらには，それほど親しくない友人（1.90）とメル友（M=2.66）との間（5%水準）で有意差が認められた．以上のように，3群それぞれの間に有意な差が見られた．したがって「悩みの相談をしたことがある」については，親しい友人，メル友，それほど親しくない友人の順にその得点が高いことが明らかになった．

表11　質問項目３の得点平均と標準偏差

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
平均	3.52	1.90	2.66
標準偏差	1.27	1.05	1.37

表12　質問項目３の分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
グループ内	139.70	2	69.85	45.83***
グループ間	480.09	315	1.52	
合計	619.80	317		

***p<.001

3. 2. 4 「質問項目４ 気持ちが素直に表現できる」の分析

表13は，各条件の「質問項目４ 気持ちが素直に表現できる」の得点平均と標準偏差を示したものである．一元配置分散分析の結果（表14），条件の効果は有意であった（F (2,315) =7. 50, p<.001）．さらに，最小有意差法（LSD法）を用いた多重比較を行ったところ，親しい友人（M=3.11）とそれほど親しくない友人（M=2.52）との間（5%水準），親しい友人（M=3.11）とメル友（M=2.75）との間（5%水準），で有意差が認められた．その一方，それほど親しくない友人（M=2.52）とメル友（M=2.75）との間には有意差はみられなかった．

表13　質問項目４の得点平均と標準偏差

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
平均	3.11	2.52	2.75
標準偏差	1.17	1.01	1.19

表14　質問項目４の分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
グループ内	18.99	2	9.49	7.50***
グループ間	398.73	315	1.27	
合計	417.71	317		

***p<.001

3. 2. 5 「質問項目５ 客観的な意見をもらえる」の分析

表15は，各条件の「質問項目５ 気持ちが素直に表現できる」の得点平均と標準偏差を示したものである．一元配置分散分析の結果（表16），条件の効果に有意差は認められなかった（F (2,315) =0.56, $ns.$）．

表15　質問項目５の得点平均と標準偏差

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
平均	2.98	2.96	3.10
標準偏差	0.99	1.04	1.14

表16　質問項目５の分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F値
グループ内	1.25	2	0.63	0.56
グループ間	351.67	315	1.12	
合計	352.92	317		

4. 考　察

今回の調査では，大学生のケータイ・メールによるコミュニケーションにおける相手への親密度（親しい友人，それほど親しくない友人，メル友）と自己開示的なコミュニケーションとの関連性を探索的に明らかにすることを目的とした．そこで，親しい友人，それほど親しくない

表 17　ケータイ・メールによる自己開示的コミュニケーション分析結果まとめ（得点順位）

	親しい友人	それほど親しくない友人	メル友
1 面と向かって話せないことが伝えやすい	1	1	3
2 型にはまったやりとり	2	1	2
3 悩みの相談をしたことがある	1	3	2
4 気持ちが素直に表現できる	1	2	2
5 客観的な意見をもらえる		有意差なし	

友人，メル友に対する自己開示的なコミュニケーションに関する5項目それぞれについて，一元配置分散分析を行った．その結果をまとめたのが表17である．表中の数字は得点順位を示している．有意差が認められなかった場合には，同順位とした．

今回の調査から得られた知見は，表17に基づき，以下のようにまとめることができる．

(1)「親しい友人」とのケータイ・メールによる自己開示的コミュニケーション

親しい友人は，メール上では，メル友よりも面と向かって話せないことが伝えやすく，やりとりも型にはまることなく，悩みが相談でき，気持ちが素直に表現できる相手と認識されている．つまり，先行研究で明らかにされているように，ケータイ・メールによって，親しい仲間との関係を維持（辻と三上，2001；小林と池田，2004など）していると解釈できる．

(2)「それほど親しくない友人」とのケータイ・メールによる自己開示的コミュニケーション

ケータイ・メール上では，面と向かって話せないことが伝えやすいが，型にはまったやりとりをしてしまう傾向にある．また，悩みを相談する相手としては，親しい人やメル友ほどではない．気持ちが素直に表現できるという点については，親しい友人以下であり，メル友とは差がない．この結果は，それほど親しくない友人とのケータイ・メールによるコミュニケーションは，面と向かって話しにくいことが伝えられるが，面識があるために，礼を失することがないように型どおりのやりとりをしてしまう，また，相談がしにくく，気持ちを素直に表現しにくい，といった傾向があると解釈できよう．

(3) メル友とのケータイ・メールによる自己開示的コミュニケーション

話しにくいことを伝えやすい相手としては，知り合い（親しい友人，それほど親しくない友人）ほどではない．親しい友人程度に型にはまらないやりとりをしており，それほど親しくない友人よりもくだけたやりとりをしているようである．親しい友人ほどではないが，それほど親しくない友人以上に悩みを相談できる存在である．また，親しい友人ほどではないが，それほど親しくない友人程度には，メール上で気持ちを素直に表現できる相手である．

ただし，「面と向かって話せないことが伝えやすい」ことについては，親しい友人とそれほど親しくない友人への項目「1. メールの方が直接話すよりも，面と向かって話せないことが伝えやすい」とメル友への質問項目「1. 知り合いに話せないことを伝えたことがある」とが対応する項目として十分であったか問題として残る．そのために，結果が損なわれたおそれがあることも否定できない．よって，メル友よりも，親しい友人やそれほど親しくない友人のほうが，「話しにくいことを伝えやすい」のかについては，さらなる検討が必要である．

項目5「客観的な意見をもらえる」については，3群に有意差が見られなかった．親しい人は親しい人なりに，それほど親しくない人はその人なりに，メル友はメル友なりに客観的な意見を言ってくれるということであろうか．それとも，「客観的意見」については，相手の経験など親密度以外の要因も関わっているためかも知れない．

この点についても，さらなる検討が必要である．

最後に，本調査は，無作為抽出に基づくものではなく，またサンプル数も十分でないため，あくまで探索的なものにすぎない．今後も調査を重ねていく必要があることを付記しておきたい．

参考文献

遠藤薫（2005）．モバイル・コミュニケーションと社会関係－携帯メールとパソコン・インターネットメールの比較を通じて－．モバイルソサエティレヴュー 未来心理 1 モバイル社会研究所 pp.126-131.

Fisher, C. S.（1982）. *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town City.* U.S.A. UCP.

Granovetter, M.（1973）. Strength of weak ties. *American Journal of Sociology, 78*, 1360-1380.

橋元良明・小松亜紀子・栗原正輝・斑目孝司・アヌラーグ・カシャブ（2001）．首都圏若年層のコミュニケーション行動—インターネット，携帯メールを中心に—．東京大学社会情報研究所研究紀要，16, 94-210.

石川勝博（2005）．「ケータイ・コミュニケーション」の逆機能に関わる要因の調査研究．教育研究（国際基督教大学学報 I-A），47，145-156.

石川勝博（2007）．大学生のケータイ・メールによるコミュニケーション - メールの利用とケータイ・コミュニケーションの逆機能的側面との関連性 -．人間科学，24(2)，15-28.

古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央（2005）．友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連対人社会心理学研究，5，21-29.

古谷嘉一郎・坂田桐子（2006）．対面，携帯電話，携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果：コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して．社会心理学研究，22，72-84.

Kiesler, S., Zubrow, D., Moses, A & Geller, V.（1985）. Affect in computer mediated communication : an experiment in synchronous terminal-to-terminal discussion. *Human Computer Interaction, 1*, 77-104.

小林哲郎・池田謙一（2004）．インターネット利用は社会参加を促進するか ～パソコン・携帯電話の社会的利用の比較を通じて～．平成 15 年度情報通信学会年報，pp.39-49.

松田美佐（2000）．若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄化論から選択的関係論へ－．社会情報学研究，4，111-122.

松田美佐（2006a）．モバイルコミュニケーションの現在山崎 敬一（編）モバイルコミュニケーション—携帯電話の会話分析 大修館書店 pp.31-43.

松田美佐（2006b）．ケータイをめぐる言説 松田美佐・伊藤瑞子・岡部大介（編）ケータイのある風景—テクノロジーの日常化を考える pp.1-24.

三宅和子（2001）．ポケベルからケータイ・メールへ—歴史的変遷とその必然性— 日本語学，20(9)，6-22.

三宅和子（2005）．携帯電話と若者の対人関係 橋元良明（編）講座社会言語科学 第 2 巻メディア．ひつじ書房 pp.136-155.

中村 功（2001）．携帯メールの人間関係．東京大学社会情報研究所（編）日本人の情報行動 2000 東京大学出版会 pp.271-303.

中村 功（2003）．携帯メールと孤独 松山大学論集，14(6)，85-99.

中村 功（2005）．携帯メールのコミュニケーション内容と若者の孤独恐怖 橋元良明（編）講座社会言語科学 第 2 巻メディア．ひつじ書房，pp.70-84.

川口潤・渡辺はま・中井雄介（2003）．日常場面のコミュニケーションにおける伝達内容とコミュニケーション手段に関する研究—高校生・大学生・壮年を対象として— 情報文化研究，6，169-196.

青少年研究会編（2001）．今日の大学生のコミュニケーションと意識．

杉谷陽子（2007）．メールはなぜ「話しやすい」のか？: CMC（Computer-Mediated Communication）における自己呈示効力感の上昇 社会心理学研究，22，234-244.

岡田朋之・松田美佐・羽渕一代（2000）．移動電話利用におけるメディア特性と対人関係 - 大学生を対象とした調査事例より - 平成 11 年度 情報通信学会年報，pp.43-60.

田中ゆかり（2001）．大学生の携帯メイル・コミュニケーション 日本語学，20（9），32-43.

富田英典（2002）．ケータイ・コミュニケーションの特性．岡田朋之・松田美佐（編）ケータイ学入門 有斐閣，pp.75-96.

辻 大介（2006）．つながりの不安と携帯メール 関西大学社会学部紀要，37(2)，42-52.

辻 大介・三上俊治（2001）．大学生における携帯メール利用と友人関係 大学生アンケート調査の結果から 第 18 回情報通信学会大会 2001（平成 13）年 6 月 17 日 個人研究発表配付資料.

辻 大介（2003）．若者における移動体通信メディアの利用と家族関係の変容「ケータイ」される家族関係のゆくえを探る．21 世紀高度情報化，グローバル化社会における人間・社会関係 関西大学経済・政治研究所研究双書 第 133 冊，pp.73-92

辻 泉（2007）．ケータイの現在 富田英典・南田勝也・辻泉（編）デジタル・メディア・トレーニング情報化時代の社会学的思考法 有斐閣選書

pp.23-45.
読売新聞 2006年6月12日
http://www.yomiuri.co.jp/feature/fe6100/
news/20060611i213.htm